

---

**一日 2 3 時間の君へ、紅蓮の剣を捧げましょう。**

音無和哉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

一日23時間の君へ、紅蓮の剣を捧げましょう。

### 【Nコード】

N2302Y

### 【作者名】

音無和哉

### 【あらすじ】

8月と契約している高校1年生の燕去雁来は、契約を果たすため何だかよく分からないモノと徹夜で戦う仕事をしていた。

そんな雁来が一番の楽しみは、後ろの席の氷姫、仲春閨と話すこと。話さない、笑わない美少女、“氷姫”は雁来とはよく話すしよく笑う。

そんなある日、6月の契約者である学年一の美少女涼暮鳴神と仕事を  
をしているとき、見たこともない敵が現れる。

戦っている最中、結界が張られているはずの扉が開き仲春が現れる。

私の時間を返して。

これは何のために戦っているのか分からない少年と、時間を取り戻  
すため戦う少女の物語。

「一日23時間の君へ、紅蓮の剣を捧げましょう。」

## 葉月の契約者と氷のお姫様

### 暦の契約者

12人がそれぞれの月と交わした契約。

契約によって得られるもの、武器と能力。

契約によって縛られるもの、「戦い」。

契約は世襲される。

契約から逃げることはできない…

「…ろ。起きろ！しほめちう燕去！」

笑い声と怒鳴り声？

俺の名前が呼ばれたような…

「いてっ！」

急に頭上に痛みが走った。

「いてっ！じゃない！今、授業中なんだけど？」

顔を上げると、確か古文こぶんの担当の教師が俺の席の前に立っていた。

古文ということは、おそらく午後の最後の授業だろう。

「すみません…」

「お前なあ、何回目だ？他の授業でも寝てるって聞くぞ。夜更かしよふして何やってんだか。」

あきれたようにその教師は教卓に戻っていく。

夜更かししてお前らの安全を守ってやってるんだよ…

俺は、授業に集中できそうにないが、だからといって今寝る度胸は無いので外を見ることにした。

こういうときに窓際の席だと便利だなと、感じる。

俺には秘密がある。

国家級の秘密。

「見た目は子供、頭脳はなんとか」みたいな感じに、表面上は普通の高校1年生を装っている。

本業は一応霊祓師っぽいものだ。

ばいものであってソレではない。

実際俺には、いや俺達には何を祓っているのか、なにと戦っているのかすらわからない。

「つばめくん、いっしょに帰りましょ」

気が抜けるような甘ったるい声が聞こえてきた。

「あ？」

「やだーつばめくん、こわーい。」

数人の女子が固まって俺の席の周りにきていた。

どうやら、ボーっとしているうちに授業どころかHRも終わっていたらしい。

「ねえねえ、由美ね今日カラオケ行きたい。」

「それ、いいね。つばめくんも行くよう。」

うぜえ。

「そうだあ。カラオケ行くんだったらあ、そのあとさあ。」

ガタッ

後ろの席で結構大きな音がした。

「感じるっ。」

「ねえ、ちょっと可愛いからって調子のとてんじゃね？」

俺の周りにいた女子達は、俺の後ろの席の住人を罵りながら、教室

の外に行った。

「さんきゅ。助かった。」

俺は後ろの席に礼をいう。

「別に、君を助けたわけじゃない…」

そう返される。

このやり取りは毎日やっている。

最初は、ただ音をたててしまっただけなんだと思っていたが、どうやら後ろの席の美少女はいいやつらしく、俺が困っているのを知ってて女子を追い払ってくれているらしい。

「でも、助かったからありがとななかはる仲春。」

「嫌なら嫌ってはつきり言っただろうがいいと思う。」

なかはる仲春は長い髪を手でかきあげながら言った。

「言いたいんだが、あいつらって日本語通じるのかわからなくて、通じなかった場合俺が痛いやつに見られるじゃないか。」

仲春はクスツと笑った。

「確かに、日本語通じない人に一生懸命話しかけてたら痛い人ね。」

本当は嫌って言うてしまうのが早いとは分かっているんだが、俺は

仲春としゃべるのが嫌いじゃない。

いや、むしろ好きだ。

だから、あいつらに絡まれなければ仲春と話することも無くなるわけであって、あえてアイツらを追い払わないでいる。

「雁来<sup>かりき</sup>、帰ろう。」

仲春と話していると、後ろから声をかけられた。

茶髪のツインテールにパツチリした大きな目、学年で一番可愛いとまで言われている少女、涼暮<sup>すずくなるかみ</sup>鳴神。

いわゆる幼馴染というやつで、いつも俺と一緒に下校している。

「ん、じゃあな仲春。」

さっきまで笑っていた仲春が、無愛想な顔になる。

「ええ。」

「雁来<sup>かりき</sup>って仲春さんと仲いいんだね。」

帰り道、鳴神がふと思いついたように言った。

「別に普通だろ？」



「えー普通じゃないよ。 “氷姫”<sup>「おしろひめ」</sup> 仲春<sup>「じゅん」</sup> 閨<sup>「ごん」</sup> って有名じゃん。 あんまり  
しゃべらないし笑わない、氷のお姫様。」

氷姫なら俺でも知ってる。

だが…

「仲春は人並みに喋るし人並みに笑うやつだろ。」

「だ・か・ら、それって雁来にだけなんじゃない？ やっぱり仲いいんだ。」

「へーへーそーですね。」

「ふうー。」

鳴神は頬を膨らませた。

「あつ、そうだ。 今日って雁来、仕事の日？」

「ああ。 お前<sup>なるかみ</sup>もだろ？」

「うん…」

部屋のデジタル時計が21:00と表示された。

「行きますか…」

俺は部屋をでて、廃ビルの屋上を目指した。

このビルがこの町で一番高い建物だから、町を一望できる。

「おそかったね、雁来。<sup>かりき</sup>」

屋上に着いたとき、すでに鳴神の姿があった。

「お前が早いんだろ。」

鳴神は口角を上げてにつこり笑った。

「じゃあ、行くよ。」

「ああ。」

「我、<sup>われ</sup>葉月<sup>はづき</sup>の契約者、<sup>つばめさりかりき</sup>燕去雁来。契約に答えよ！“力”<sup>ちから</sup>の名の下に  
“勇気の剣”<sup>けん</sup>を！！」

『契約に答えよう。お前に剣を。』

「我、<sup>みなづき</sup>水無月の契約者、<sup>すずくれなるかみ</sup>涼暮鳴神。契約に答えよ！“恋人”<sup>こいびと</sup>の名の下に  
“魅力の銃”<sup>みりよくじゆう</sup>を！！」

『契約に答えましょう。あなたに銃を』

俺の手には紅く光る剣が、鳴神の手には桃色に光る銃が、握られる。

これが契約。

「雁来、勝負よ。」

「ああ。」

「レディゴー！」

俺と鳴神は一斉にビルの屋上から飛びだした。

俺は東に、鳴神は西に。

「さっそく見つけた。」

黒く、黒く、闇のような物体。

それがなんなのか分からないが、とにかくコイツを倒せばいい。

楽なことにコイツはとても弱い。

弱いのだが、いるだけで人間の害になるらしい。

いくら弱いと言っても、普通の人間には見えないし、見えたとしても攻撃できない。

だが、俺達契約者の武器でちょっと攻撃すればすぐに消滅してしまう。

俺は、そいつに向けて剣を振るう。

『ギャー』

「1対目つと。」

その後も俺はそいつらを見つけては消滅させた。

2：30

廃ビルの屋上に戻る。

すでに鳴神の姿がある。

「俺は65体。」

今日、あいつらを何体倒したのかを報告する。

「うっ…あたし64体。」

「今日は俺の勝ちだな。」

「先週はあたしの勝ちだった!」

「だが、今日は俺の勝ちだ。ずべこべ言わずにトンカツ君買って来い。」

賭けていたトンカツくんの話でもりあがっていると、急にあたみに武器が話しかけてきた。

『『 契約に基づき命ずる。戦闘準備を。』』

「雁来！<sup>かりき</sup>！」

「ああ、わかってる。」

この時間になっても動けてるやつはかなりしぶとい。

あいつらの動ける時間は大体21:30〜2:00の間だ。

たまに、それ以外でも動けるやつらがいて、ものすごく迷惑だ。

「次来るやつあたしが倒したら同点ね。」

よっぽどトンカツくんをおごりたくないらしい。

「ああ、割り勘ですましてやるよ。」

「ははっ。了解。」

『契約者みーつけた』

「…え？」

感じる存在感、気配、全てが今まで戦ってきたあいつらと同じものなのに…

そいつは…

「人間…？」

人とまったく同じ形をしていた。

俺達より少し年上ぐらいの女性の姿。

『残念。私は人間ではないわ。』

「敵よ…ね？」

鳴神が俺に視線を送ってくる。

わからない…。

今まで戦ってきたあいつらは30センチほどのまるい塊だった。

人間の姿をしたやつなんて一体もいなかった。

『そうね、私は敵よ！ハアツ！！』

敵と名乗った女性は俺達に向けて札を飛ばしてきた。

俺と鳴神は瞬発的に飛翔系の術を使いそれをよけた。

俺達がもっていた場所を振り返り見てみると、燃えていた…

「マジかよ…」

「雁来！！」

「え？」

前を向くと、目の前に女性の姿があった。

『戦ってる最中に敵に背中を見せちゃだめよ。』

「うわああああ！！！！！！」

女性は俺に雷系の札を貼ったのだろう、体中を電撃がはしる。

俺はビルの屋上に墜落した。

「雁来！！！！！」

鳴神の悲鳴が聞こえる。

「…うつ」

自分で思ったより流血しているみたいだ…

本当は戦いたくなんかないのに…

「契約に答えよ“恋人”の名の下に…」

『遅い！』

「いやああああああ！！！！！！！」

「鳴神！！！！！」

戦いたくないなんていつてる場合じゃない。

戦わなきゃ殺される。

「契約に答えよ“力”の名の下に我、紅蓮の炎を欲する!! “勇氣の剣”を炎で纏え!!」<sup>まと</sup>

『契約に答えよう。お前に炎を。』

俺の剣が燃える。いや、炎をだしている。

「はあああああつ!!!!」

女性のところまで飛び、剣を振るう。

『ギャ————!!!!』

「うわぁ!!!!」

皮膚のこげたにおいがする。

嫌だ!

俺は人を殺したくない!!!!!!!!!!

キー

屋上の扉を開ける音がした。

「誰…?」



屋上には結界を張ってあって普通の人間が入れないようにしてある。

他の契約者か？

「…なさい！…！…！返しなさい！…！…！…！私の時間を返しなさい！…！…！…！」

この声…

俺は、敵に背を向けることになるが、振り返る。

そこにいたのは…

「仲春！…！…！」

俺のクラスメイトで後ろの席。

氷姫こと仲春閨だった。

## 一日が一時間少ないお姫様

「私の時間を返しなさいよ！！！！！」

俺が振り返るとそこには仲春なかはるの姿があった。

『これはこれは、23時間のお姫様。』

「私の時間、返してよ！」

仲春は叫んでいる。

「23時間のお姫様……？」

俺がそうつぶやくと仲春が俺の存在にやっと気づいたみたいにくちを向いた。

「燕去……？」  
つばきやう

『8月の契約者、何度同じことを言わせるのかしら？』

正面には敵の姿。

なんというデジャブだろう。

また、敵は札を構えている。

さすがに、今墜落したら仲春も巻き込んでしまうだろう。

しょうがない。

「我、葉月の契約者。 契約を果たす!!!!!!!!!!」

『契約に答えよう。 お前に契約を果たすだけの力を。』

「はああああああああああっ!!!!!!!!!!」

俺は力いっぱい炎が纏った剣を敵に振るった。

『ギャ——————』

女性から血があふれ、地面に墜落する…

「仲春!!!!!!」

「大丈夫だよ。」

答えたのは仲春ではなく、仲春を抱えた鳴神だった。

俺は地面を見た。

俺が斬ったんだ…

無残な光景。

キモチワルイ。

『よくも、よくも!!!!!!!!!!』

女性が動こうとする。

…だが、やはり傷が痛むのだろう。一行に動かない。

「降ろして。」

仲春が鳴神に言う。

「…うん。」

俺と鳴神は女性が倒れている屋上に降りた。

降りたとたん、仲春は女性に近づく。

「おい、仲春！」

仲春は俺の言葉を見殺して女性に近づく。

「質問よ。あなたはクロノス？」

無愛想な声で仲春が聞く。

『いいや、私はお前の時間を奪ったやつではないよ。』

「そう、じゃああなたに用はないわ。封印させてもらう。」

『23時間の姫君。出会えたなら、クロノスによろしく伝えてくれ。』

仲春は頷いた。

「闇を囲むのは私。私を囲むのは光。私は光に捕らわれよう、ならば闇は私に捕らわれよ！封印！！」  
おまえ

あたり一面が光、目を閉じてしまい、俺が目を開けた頃には無残な姿の女性は消えていた。

「仲春、お前は何者だ…？」

「私は…」

仲春は俺の質問に答えようとしなない。

「燕去こそ何者なの？」

「俺は…」

同じところで言いとどまっていまい、俺達は顔を見合わせて笑った。

「俺は暦の契約者って呼ばれてる。俺の先祖が8月、葉月と契約してからずっと俺の一族は契約を守って変なやつらと戦ってる。んで、戦う代わりにこの剣と炎を自由に使わせてもらって契約。」

まあ、簡単に言うところなもんだろ。

「私は一応結界師って職業。うちも先祖から続いてる。狂った神様とか霊を祓ってる。」

仲春は自分が戦ってるもんが何かを理解しているのか。

「23時間の姫ってのは？」

「…私には1日が23時間しかないの。昔、1時間取られちゃったの。」

一日が23時間しかない？

意味がいまいち分からない。

あれか、1時間ずっと寝てるとかか？

「えっと…？残りの1時間はどうしてるのかな？」

口を開いたのは鳴神だった。

鳴神もどうやらそこに引つかかったらしい。

「私はこの世界から1時間消えているの。」

「？」

「他の人たちが世界中を探しても1時間、私はどこにもいない。世界から消えているから。」

「えっと、つまり1時間ぽっかりお前がいなくてことか？」

「そういうこと。どこで何をしているのかはわからない。私にも記憶が無い。気づいたら1時間たってる。」

「それって…つらくないか？」

仲春はつらそうな顔を一瞬して、笑顔を作ってこういった。

「つらいよ。だから、どんなことをしてでも取り返すの。」

「取り返す？」

「ええ。私から時間をとった、クロノスから。」

「クロノスって時間の神か？」

「うん。時間の神、クロノス。昔ちよつと色々あつてね。」

時間の神、クロノスは俺たちともかなり関係が深いと聞いたことがある。

聞いただけで、どう関係があるのかは知らないけど…

「お前はこれから一人でクロノスを探すのか？」

「うん、それしかないから。」

「俺と一緒に探してやるよ。」

「え？」

それが俺が戦う意味になれば…

「さっきみたいなのがまた出てきたらお前がいてくれると助かる。お前も戦闘能力はそんなになさそうだし、利害は位置していると思うけどな。」

「そうだね、契約者全員と利害関係は一致するわね。あたしは賛成かな。」

「じゃあ、お願いしようかな。」

「じゃあ、これからよろしくな。」

「ええ。」

23時間の孤独な姫は仲間を手に入れましたとさ。

さあ、あと何日で終わってしまうのかな？

黒いマントを羽織った男性が姫と契約者の取引をあざ笑うかのよう  
に、遙か上から眺めている。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2302y/>

---

一日23時間の君へ、紅蓮の剣を捧げましょう。

2011年11月5日03時15分発行